造影ＭＲＩ検査についての説明書（紹介医療機関様用）

➤検査の必要性について

造影ＭＲＩ検査で体内の画像を得て、体の状態をより正確に把握し、今後の治療等に役立てます。

➤検査方法について

・ＭＲＩ検査は、強力な磁力（磁石）を使い、磁場と電波により体内の断面を撮影します。放射線を使用する検査ではありません。

・細長いトンネルのような構造になっているＭＲＩ検査装置の中に入って検査を行います。検査時間は約20分程度ですが、撮影箇所によっては1時間ほどかかる場合もあります。検査中は磁場を変化させるため検査装置から大きな音が出ます。

・造影ＭＲＩ検査は、造影剤を血管内に注射して検査を行います。造影剤が全身の血管や臓器に分布し、病気の性質、血管や臓器の様子がより鮮明に描出できるようになります。検査の途中で造影剤を注入します。あらかじめ点滴用の針を入れてから検査を行う場合もあります。

・検査中、体を動かさないようお願いしています。気分が悪くなった場合には、ブザーでお知らせいただいていますが、モニターでも検査室内の状況を観察しています。

・検査室内への金属類などの磁性体の持ち込みは禁止です。検査室内には常に強力な磁場があるため、金属を含む物を持ち込んだ場合、ＭＲＩ装置に引き寄せられて飛んだり、熱を帯びたりして大変危険です。また、磁気性のものは使用不能になる場合があります。

　　　＜原則的にＭＲＩ検査室に持ち込めないもの＞

　　　　補聴器、カラーコンタクトレンズ（コンタクトレンズ可）、時計、ネックレス、指輪、ピアス、ヘアピン、かつら、入れ歯、エレキバン、カイロ、ニトロダーム、各種貼付薬、磁気カード、金具が付いている下着など

　　　　※検査部位と関係のない場所であっても、事前に外していただきます。

➤更衣について

・検査前に当院の検査着に着替えていただきます。着替えることが困難な方は「MRI検査時の注意事項」を読んだうえ、金属の付いていない服装でお越しください。検査前に確認をさせていただき、金属類や火傷の可能性のある素材が衣服に含まれていた場合は、着替えが必要となりますのでご了承ください。

➤検査の副作用と対処方法

・ＭＲＩの検査中は、振動や刺激、身体全体に温かい熱を感じることがあります。

・体内に金属や刺青が入っている方は、磁場の影響により、材質によって金属等が熱を帯び、低温やけどを引き起こすことがあります。

・軽度の副作用として、吐き気、嘔吐やじんましん、動悸、熱感など、それぞれ0、1％（1000人に1人）程度の割合で起こります。これらの症状は、注射後3時間以内に起こることがほとんどですが、数時間経ってから起きる症状（多くはじんましん）もあります。特に治療や処置を必要としないことが多いですが、点滴や薬の処方などを必要とする場合もあります。

・重篤な副作用として、呼吸困難や血圧低下、腎不全、意識障害などの生命に危険を及ぼしうることが極めてまれ（20万から45万人に1人程度）に起こる場合があります。

・注射時に薬剤が血管の外に漏れ出てしまう合併症が起こることがまれにあります。多くの場合痛みを伴いますが、漏れた場合も量は少ないため自然に体内に吸収されていきます。冷やすと痛みが和らぐことがありますので、検査担当者にお申し出ください。

➤ＭＲＩ検査に関する注意事項

◎ＭＲＩ検査ができない可能性がある方

①金属類を体に身につけている方

＜例＞

・頭部、心臓に金属製の医療器具のある方（ペースメーカー、埋込式除細動器など手術で埋め込んだ医療器具、人工内耳など）

・義肢・人工関節・骨折治療用金属、ボルト、コルセット、磁石を使用している医療器具（義眼やインプラント）を使用している方

・金属加工等の仕事に勤務した経験もしくは事故などで、体内（特に眼）に金属片/粉が入っている方

・刺青（眉、アイライン含む）、美容整形で埋め込まれた金糸等、金属イオン類を含んだ化粧品・アイシャドーをしている方

　　　②妊娠中の方（胎児の月齢によっては検査を延期する場合があります。）

　　　③狭い場所の苦手な方、閉所恐怖症の方

④検査中に動いてしまう可能性のある方や仰向けで長時間寝ていられない方

（小児、全身状態の悪い方など）

➤造影剤使用に関する注意事項

（1）造影剤使用の禁忌（造影剤を使用してはならない場合）

・ガドリニウム造影剤に過敏症がある方

（2）造影剤使用の原則禁忌（造影剤を使用しない事を原則とする）

・気管支喘息の方

・重篤な肝障害・重篤な腎障害のある患者

・一般状態の極度に悪い患者

※これらの方にそれでも造影剤検査が必要と思われる場合には、小牧市民病院の各診療科にご紹介ください。各診療科医師と放射線科医師との協議の上で造影剤使用の適否を判断させていただきます。

（3）造影剤の慎重投与：以下の場合には慎重に投与する必要があります。

・アレルギー性鼻炎・発疹、じんましんなど、アレルギーを起こしやすい体質を有する患者

・両親・兄弟が、以下の疾患を有する患者

（気管支喘息・アレルギー性鼻炎・発疹・じんましんなど、アレルギー）

・薬剤過敏症の既往歴のある患者

（4）その他

　　・検査担当者の判断により、造影剤を使用せずに検査を終了する場合があります。

➤その他の注意事項

・造影ＭＲＩ検査を行わずに、造影剤を使用しないＭＲＩ検査、ＣＴ検査、超音波検査など他の検査を選ぶこともできます。

➤費用について

・撮影方法によって異なりますが、３割負担の方で８，０００円～１４，０００円になります。